

友だち遊びの一年間

友だち遊びの指導の実際——三才児

森 田 外 喜 子

母親の手をしっかりと握り、不安と好奇心とで一杯になつてゐる子どもたち、ずっと母親が傍にいてくれるものと信じて、思いきつて一人で玄関に入ってきたものの、母親は帰り、自分一人になつてびっくりし、突然押し寄せてくる不安を抑えきれず、母親を大声で呼んだり、泣いたりする子どもたち、「お利巧にしてね。泣いたらおかしいですよ」など、母親にいわれててきたのか、一生懸命泣きたいのを我まんし、フルブルふるえながら、人形のようによく立っている子ども。四月入園当初は、私たち教師は、一体いつ、この子どもたちが落ち着いて、楽しく友だちを見つけて遊べるようになるのだろうかと不安におそれます。

生まれて、初めて家庭以外の社会にだされた幼児が、この新しい環境、ナースリー・スクールで、いかに楽しく、充分に満たされ得すことができるか、また家庭以外の人と、いかに交り、その生活を抜けていくかということが、私たちに与えられた大きな問題であります。ここナースリー・スクールは、園児三〇名、教

師四名の三才児ばかりの集まりです。私たちは、この子どもたちが、自分を充分に發揮しながら友だちと一緒に、楽しく遊べるようにということを、年間の大きな目標と致します。友だちと一緒に、仲よく遊べるようにと願う前に、一人一人の子どもが充分に、一人遊びを楽しみ、自分で一つの遊具を通して、伸び伸びと過せるようでなければなりません。自分で充分一人遊びができるようになります。友だちと遊ぶように望んだり、仲良くするように強要したりした場合、必ずといっていい位、大人を意識し、その遊びは、想像性、発展性に欠け、自主独立の精神に欠け、何よりも遊べない子どもになってしまいます。遊べない子どもは、いかに世の中についていけばよいのか、わからない大人の状態と同じだと思います。友だちと一緒に楽しく遊び、社会の一員として过せるように、その基礎のつくられるこの三才児の一人遊びは、いかに大切かを痛感致します。

最初は、泣きわめく子どもにも、ゆったりと落ち着いた態度で

話しかけたり、子どもと一諸に困ってみせたり、早くお迎えを頼むということを、玩具の電話でかけたり、入園当初のナースリー・スクールは、泣き声と玩具のざわめきで一杯ですが、ます新しい環境に慣れるように、即ち、先生にも、建物にも、遊具にも、充分に慣れるように万全の努力を致します。

保育室の戸棚には、誰からも侵されることなく、充分に好きな遊具で遊べるように、さまざまの遊具を数多く揃え、自由に取りだせるようにしておきます。泣いて室内に入つてこなかつたり、室内に入つても壁のところにくつづいて離れずについる子どものところへ、それとなくボールをころがしてみたり、汽車を近づけたり、そつと積木の籠を、置いたり、ビーズ通しをしたり、パズルをわざと間違えてはめてみたり、人形の洋服を着せ替えたりして、遊びに対して興味を起させます。そしてそれとなく、今その子どもが目で追っている物を見つけだし、その指導に努めます。

子どもたちの多くは、先生を通して、ナースリースクールに慣れていくようです。ほとんどの子どもが、先生対自分という人間関係のもとに徐々に、その活動範囲を拡げていきます。まことに、子どもたちの多くは、先生を通して、ナースリースクールに慣れていくようです。ほとんどの子どもが、先生対自分という人間関係のもとに徐々に、その活動範囲を拡げていきます。まことに、

びです。次の例は、教師を媒介として、一人遊びの傍観者だった子どもが、他の子どもと話をし、笑い、行動をともにしていった過程を記したものです。

例　ままごとの部屋には、美容院ごっこができるように、木箱を台にし、その上に、櫛や、タオル、化粧品の空ビンを並べ、台の前に、椅子が一脚、置いてある。

遊びにはいれない女の子たちが、ウロウロしているので、教師が、椅子に腰掛け、
教師「あのー、誰かハーマ屋さんになつて、私の髪を、きれいにして下さいませんか」とすると、たちまち、四人の女の子が、やってきて「私が、してあげる」「私も」「私も」の声がかかり、それぞれ、櫛を持ったりビンを持ったり、タオルを持ったり、早速、髪を、いじりはじめる。H子は、傍にきて、それをみている。

教師「H子ちゃんも、してちょうだい」というが、手を後にまわして、ニコッと笑うだけである。そこで、しばらくそのままにしておく。二、三分たつてから、また声をかけてみると、

教師「H子ちゃん、頭がかゆいので、この薬をかけて下さい」とビンを、手渡す。すると手をだして、ビンを受け取り、さかさにして、頭にかける動作をする。それは、今、他の子どもがしていた通りの動作である。しかし、一人の頭にかわいい美容師が何人もかかっているので、なかなか思うようく遊べない。H子は、また、見ている状態に、戻りそうになる。

教師 「この赤ちゃんの髪、とっても長くのびてるでしょ？ きれいにして下さい」 H子は、あいた櫛を見付け、持ってきていたり始める。

教師の髪ができ上ったので、子どものお客様と、入れ替わる。H子は、人形の赤ちゃんの髪を、いじっていたが、櫛でとしたり、洗つたりのことを、一通りすると、今度は、人形が裸なのに気がついて洋服を探しに行く。後は、着物を着せたり、ミルクを飲ませたりして遊び始める。ままごとをしていた子どもの中に行つて、お鍋にごちそうを作つたり、積木の野菜を買いに行つたり、忙がしく動いている。

こうしてある子どもは教師を媒介とし、ある子どもは遊具を媒介として、その行動範囲を拡げていき、園に慣れてきた頃、次第に一人遊びを脱けだして、次の段階に移つてきますが、その過程にはさまざまの状態が、あらわれてきます。次にその例をとりあげながら、指導の要点にふれてみたいと思います。

〔一〕漠然と「友だちが欲しい」とか、「誰かと一緒に遊びたいのに、どうして遊べばよいか解からない」といった状態が見られる。例えば、たいたたり、ひつかいたり、髪の毛をひっぱつたり、いやがる子どもの手を無理につないだりする。

例 H夫は、今まで一人で良く遊んでいたのに、一週間程前から、余り遊ばず、すぐに他の友だちを泣かせてしまう。今日も、すぐ近くにいた同年令の女の子が泣いているので、

教師 「どうしたの？」ときいてみる。

K子 「H夫ちゃんが、いじめた」

教師 「どうして」

K子 「私の目に指入れた」とのこと。すぐH夫に、

教師 「お友だちの目に指を入れる子は、お友だちと一緒にいられないの」と、はつきりいって、別室に連れて行き、しばらく

一人にしておいたが、落ち着いてきたので元の部屋に帰り、H夫ちゃんと一緒に絵本を見ましょうか。K子ちゃんもね」と、さっき泣いたK子を連れてきて、絵本を見たが、教师「今度は、K子ちゃんとH夫ちゃんとパズルしない？」とパズルをしてみると、さつと両方から手がでて、一つのパズルをし始める。

教師 「まあ、H夫ちゃんとK子ちゃんと二人ですると、上手にできるわね」とびっくりしてみせると、二人で顔を見合せ、ニコッと笑いだし、さっき泣いたこと、泣かしたことなど、すっかり忘れたような様子である。

〔二〕今までよく自分で遊んでいたのに、むやみに、教師にくついてくる。そして教師の助けを要求する。この機会が友だち遊びに発展する。

例 K子は今まで一人でお店屋さんや、ジュース屋さんをしており、ままごとの部屋で一人で遊んで、人形に洋服を着せたりしていたのに、二、三日前から、しきりに、

K子 「ねえー先生、大きい家作つてー」

「一緒に遊ぼう」といつてくる。

教師 「大きい家は、一人じゃ無理ね。お友だちも一緒になくちゃ

作れないわね。誰か深してきましょか」といつてみても、

K子 「いやーん」という。しばらく様子を見ていると、また

K子 「ねえー先生、大きい家作ってー」というので、

教師 「じゃー、何で作つたらいい?」

K子 「ゴザと積木と……

…」と答えるので

教師 「それじゃー、Hち

ゃんの積木、少し下

さいってもらってこ

なくちゃだめね。一

緒に行きましょう

ときそいかけ、どう

にか家を作つたもの

の、それ以上発展し

そうにない。どちら

うどそこへ、T男と

Y男が二人、近くで

見ているので、

教師 「入るところは、こ

つちですよ。K子ち

ゃん、お客様さまよ。

靴を脱ぐ場所を教えてあげてね」

というと、K子は、飛んでて、何かと世話をやき始めたの

で、もうこれ以上、教師のいる必要はない、との場を脱げ

でたが、彼らは次の日も次の日も、一緒に遊んでいた。

誰かが、変つたことを始めると、「私も」「私も」と集まり、

そこに並行的に、遊びが進められるが、やがて連合、協同遊び

にも展開する。

〔三〕 例 今日は、蓮根の、ハンコ押しをしようと近くにいた、一、

三人の子どもとともに準備してあつた用具をだしていると、

「何するの?」「私もしたい」「ぼくもしたい」と、集まつて

くる。初めは、一人一人に紙を与え、充分楽しませた後、少

しきい紙をだし、

教師 「HちゃんとMちゃんと二人で、おもしろいものを作りまし

ょうか」といつてみる。即座に「うん、しよう」とい、二

人で一枚の紙に、共同の模様を作り上げ、以後二人はずつと

手をつけないで、一緒に次の遊びへと移つていった。

〔四〕 遊びに変化を与えることによつて、友だちと結びつく機会を

つくる。

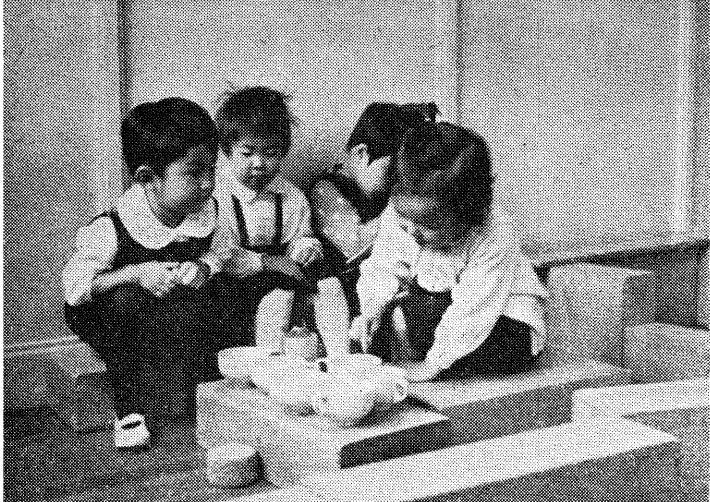
例 一人の子どもがスベリ台で遊ぶのに、ズックを脱いですべ

ついたのを真似て、他の子どももすべり始める。しばらく

様子を見ていたが、とても楽しそうなので、少し変つたこと

をすれば、もっと一つになれるかもしれないと思つて、近くで

傍観していた子どもの手をとつて、『ロンドン橋おちる』のう



たをうたつて橋の下を、すべるようにしてやると、

「今度私」と他の子どもがくる。そこで

教師 「今度は、お友だちでするのよ」と、一歩さがると、友だち

同志で手をつなぎ、ロンドン橋おちると続ける。

一人一人別々だった遊びが、一つのまとまりのあるグループ

の遊びとして展開されていく。

〔五〕 三才も半ば過ぎると、物を選択することができ、好みもはつきりしてくるので、欲しいという遊具が重なり合い、遊具の取り合いが、起ころってくるとともに、遊び友だちが活発に展開する機会となる。

例 ある朝のこと、登園後、保育室に入るや、H男は赤い車の方に突進。すぐ後からR夫も走って行き、二人で車の取り合いか始まる。二人とも絶対にゆずらない様子をして、にらみ合っている。どうとうつかみ合いが始まろうとしたその時、自分も車を使おうとやってきて、二人のケンカを近くで見ていたリーダー格の子どもに、

教師 「S夫ちゃん、二人とも自動車が欲しいっていうけど、どうしたらいのかしら」と聞いてみると、S夫は、即座に、

S夫 「昨日、R夫ちゃんが使つてたから、R夫ちゃんのだよ」
それを聞くと、H男は、あっさりと手を離してしまう。H男

は、つまらなそうに、その動いてくる車を見ているので、
教師 「H男ちゃん、いつ車があくか、きいてみてごらん」という
と、そうきかれたR夫は、

R夫 「もうちょっと。あと三分」と答え、室内を一周りした後、

いとも簡単に、H男に車を貸してしまった。その後H夫は、すぐまた取り返してしまったが、R男も、また他の車を見つけ、今度は、二人で一緒に室内を車で、かけまわり、荷物を乗せたり、降ろしたりして遊んだ。

〔六〕 いろいろの障害にぶつかり、互いに衝突しながらも、友だち同志の結びつきが強くなっていくが、誰とでも仲良く遊ぶことができない。

例 三、四人の男の子が、棒を振りまわして室内をかけまわっているので、その中の少しリーダー的な子どもに、

教師 「ねえHちゃん。みんなで積木のジェット機作らない?」

「ようし作ろう」と皆が一齊に、箱積木の所に走つていき、次々と積木を並べジェット機を作る。輪なげの輪をハンドルにして、各々が運転手になる。ちょうどそこへ着物を着て、人形をおんぶして袋を下げた女の子二人が、通りかかるので、S夫が「ちょっと運転手さん、お客様がきましたよ。乗せて下さ」って」というと、忙がしそうに動かしていた手を止めて、後をふり向き

子ども 「おはやくお乗り下さい」

といい、再び動き始める。二人の女の子どもは、乗るつもりは、なかつたらしかつたが、すぐ乗つてしまう。

教師 「どちらまでですか?」

子ども 「どうきょうまで」など、話している時、T夫が棒を持つ

て近くで見ていたが、S夫は

S夫 「おまえ、のつたらいかん」と断ってしまう。

教師 「あらT夫ちゃんは、エンジンの故障を修理する人よ。ほらちやーんと機械と油を持って調べにきたのよ」

と教師が機転をきかしていようとT夫は「うん」といったかと思ふと、ぐるっと上を向いて寝ころがり、ちょうど自動車の故障をなおす人が、自動車の下にもぐっているような恰好をして、積木のあちこちを、棒でいじり始め、いつのまにか、

グルーフに入ってしまう。子ども同志の結びつきをよくし、排他的な態度を破るために、教師の機転のある言葉や、遊びに意味をもたせたことが、効を奏したようあります。

[七]

屋さんまで運んで下さい」

「あの車、山のぼりするのに動けなくて困ってる。押してあげる人いないかしら」など、また別々にイーゼルで絵を描いていた子どものイーゼルを、そつと動かして、「あら、イーゼルで二人のお家ができる」など、さりげなくいいう教師の言葉に、子どもたちは、友だちに対する意識を刺激され、協力して遊ぶという次の段階に移っていく第一歩を、踏みだすことができるようです。

以上のように三才児の一人遊びから、望ましい友だち遊びへの過程には、さまざまの困難と、問題がはらんでいますが、この大切な時に、一人一人が伸び伸びと自分を生かしながら、他と協力して遊ぶ、楽しさを、知らず知らずのうちに経験し、良い社会人としての基礎がつくられるように、適切な指導をすることが必要であります。

(北陸学院短期大学付属ナースリー・スクール)

に、望ましい状態に発展させるために、環境構成や、適切な教師の助言が、必要である。

例 果物ごっこ、お医者さんごっこ、おうちごっこ、ベンキや

さんごっこなどのごっこ遊びを計画し、材料を揃えて環境を整えたり、友だちとの接触を多くするために遊具を減らしていくことも、必要な方法の一つです。特定の子どもばかりではなく、多くの子どもに興味を持たせるために

「あら今日、二人とも赤いスカートね」「この机、二人で本